

変わりゆく公共図書館

公共図書館^(注1) (以下、本稿では「図書館」とする)が大きく変わりつつある。活字離れ、インターネット検索の一般化、電子書籍の普及、運営する自治体の財政難など図書館を取り巻く状況が厳しさを増す中、地域の交流創出の拠点として課題解決に向けたさまざまな取り組みを実施している。本稿ではそうした図書館の姿について、地域に根差すクラブチームを目指すJリーグ^(注2)との連携事例を中心に紹介したい。

1 図書館の現状

本を借りたり、調べ物や勉強ができる場所として誰しも図書館を利用した経験はあるだろう。図書館は、地域に欠かせない、私たちにとって身近な存在だ。

図書館の現状をみると、全国の図書館数は増加傾向にあるが、貸出数は伸び悩んでいる(図表1)。また、地方自治体の厳しい財政状況を反映してか、資料費の予算額は減少傾向にあり、年間受入図書冊数も減少傾向にある(図表2)。

2 図書館の新たな取り組み

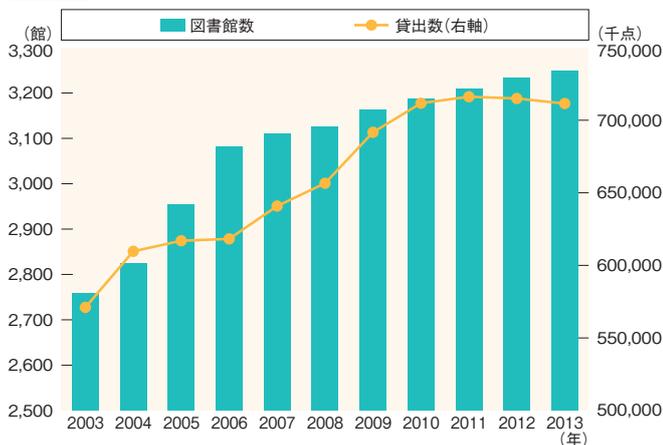
図書館の置かれている状況は厳しいが、地域にとって必要不可欠な存在となるため、図書館は変革を続けている。図書館が果たすべき基本的な機能^(注3)のほか、地域への貢献を重視し、地域の課題解決に向けた取り組みを積極的に実施している。

そのような取り組みの一つが2010年1月に全国の図書

館有志によって結成された「図書館海援隊」だ。「図書館海援隊」プロジェクトは、地域の課題解決のために図書館として何ができるかを考え、自治体内の他部署とも連携しつつ進められた。具体的には、まず2010年1月に、貧困・困窮者に関する支援として、労働・生活に関するトラブル解決に役立つ図書等の紹介・提供や相談会の開催などに取り組んだ。

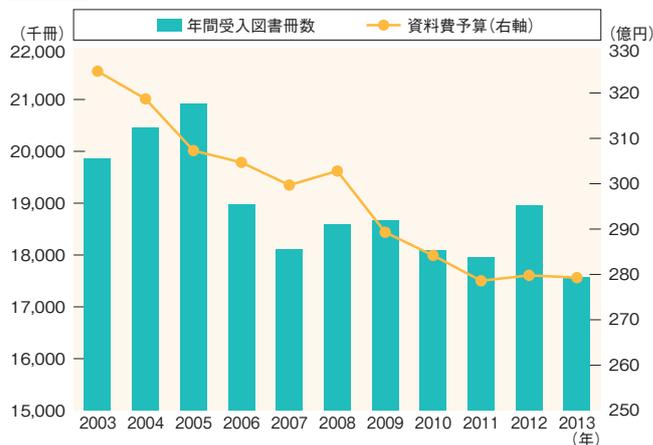
こうした活動に対し、その趣旨に賛同する図書館も増え、そのテーマも多岐にわたり、活動も広がりをみせてきた。2010年はワールドカップの開催年ということもありサッカー熱が盛り上がっている中で立ち上がった企画が「図書館海援隊サッカー部」による「図書館が、クラブチームがつながる『図書館からスタジアムへ行こう!!スタジアムから図書館へ行こう!!』全国同時キャンペーン」である。これは、Jリーグ、JFL、社会人リーグ、なでしこリーグなどに所属しているクラブチームと協働し、図書館の情報拠点化やプロスポーツチームを核としたまちづくりなど地域活性化の視点から、連携事業を実施したものである(図表3)^(注4)。

図表1 全国の図書館数と貸出数



出所:日本図書館協会「日本の図書館 統計と名簿 2013」

図表2 資料費予算と年間受入図書冊数



出所:日本図書館協会「日本の図書館 統計と名簿 2013」

事業終了後も、そのつながりは継続し、「図書館海援隊サッカー部」のFacebookページも立ち上げられるなど、さまざまな形での情報発信は続けられている。

3 図書館とJリーグ

一見、遠く離れているように見える図書館とJリーグであるが、「地域に根差し、地域のためにどう貢献するか」という根本にある理念は共通している。地域への貢献を意識したサービスを提供する図書館と地域に根差したスポーツクラブを目指すJリーグは相性がいいものと考えられる。

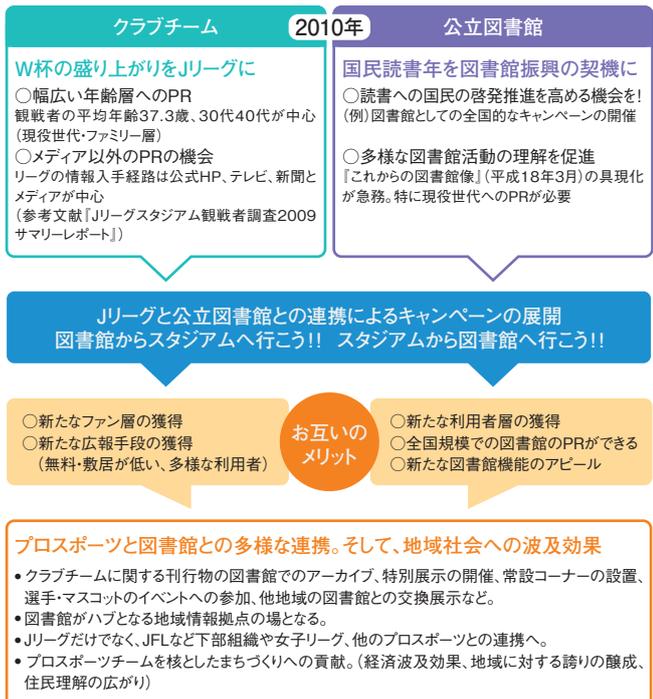
Jリーグのホームページによると、JリーグではJクラブ^(注5)の本拠地を、興行的意味合いの強い「フランチャイズ」ではなく「ホームタウン」と呼んでいる。ホームタウンとは「Jクラブと地域社会が一体となって実現する、スポーツが生活に溶け込み、人々が心身の健康と生活の楽しみを享受することができる町」を意味している。チームの名称を

「地域名+愛称」としていることにも表れているように、Jクラブはホームタウンの市民、行政、企業とともに発展していくことを目指している^(注6)。

そうしたJリーグに絡めた企画の一つに「バトルオブスパ」がある。これは、「日本一」の温泉がある地域のプロサッカーリーグ・Jリーグディビジョン2 (J2) 所属のクラブチームの対戦にあわせて、クラブチームやその地域の観光や文化についての展示を行うことで、図書館の来館者にその地域や地域のプロスポーツに対する理解を深め、親しみを感じてもらうきっかけを提供する企画である。

2010年に愛媛県立図書館(愛媛FC、道後温泉)、草津町立図書館(ザスパ草津(当時)、草津温泉)などの図書館で始まったこの企画は、その後も鳥取、山形など参加地区が入れ替わりながら現在も続いている。優勝チームにはトロフィーを直接授与するなど本格的である。5回目となる今年度は、上山市立図書館(モンテディオ山形、かみのやま温泉)など3チームで行われている(図表4)。

図表3 プロスポーツ(クラブチーム)と図書館の連携の概念図



出所:文部科学省ホームページより引用

図表4 「バトルオブスパ」参加団体一覧

年度	クラブ名	温泉名	参加図書館
2010	愛媛FC	道後温泉	愛媛県立図書館
	ザスパ草津	草津温泉	草津町立図書館
	大分トリニータ	(温泉王国)	宇佐市民図書館ほか
2011	ヴァンフォーレ甲府*1	信玄の隠し湯	山梨県立図書館
	ザスパ草津	草津温泉	草津町立図書館
	ガンナーレ鳥取	三朝温泉	町立みささ図書館・鳥取県立図書館
	愛媛FC	道後温泉	愛媛県立図書館
	サガン鳥栖	嬉野温泉	佐賀県立図書館・嬉野市立図書館・鳥栖市立図書館
2012	大分トリニータ	別府温泉	宇佐市民図書館・別府市立図書館・別府大学附属図書館
	モンテディオ山形	かみのやま温泉	上山市立図書館
	ザスパ草津	草津温泉	草津町立図書館
	愛媛FC	道後温泉	愛媛県立図書館
2013	大分トリニータ	別府温泉	宇佐市民図書館・別府市立図書館・別府大学附属図書館
	モンテディオ山形	かみのやま温泉	上山市立図書館
	ザスパ草津	草津温泉	草津町立図書館
	ヴィッセル神戸	有馬温泉	神戸市立図書館*3
	愛媛FC	道後温泉	愛媛県立図書館
2014 ^{*5}	FC岐阜*4	下呂温泉	岐阜県立図書館
	モンテディオ山形	かみのやま温泉	上山市立図書館
	大分トリニータ	別府八湯温泉	別府市立図書館・宇佐市民図書館
	V・ファーレン長崎	稲佐山温泉	長崎市立図書館

(※1)途中参加
 (※2)2013年2月1日より「ザスパ草津」から「ザスパクサツ群馬」にチーム名変更
 (※3)展示は神戸市立北図書館北神分館で実施
 (※4)神戸との交換展示
 (※5)2014年からは2nd Stage
 出所:愛媛県立図書館、上山市立図書館ホームページなどより共立総合研究所にて作成

この取り組みのメリットは、図書館×Jクラブ(サッカー)×温泉と意外性のある組み合わせにより、多くの人の興味を喚起し、図書館やJクラブ、温泉地それぞれが普段はなかなか接点の持てない人々へのPRの場を得ることができることである。地域を超えたつながりが大きな相乗効果を生み、観光振興ひいては地域の活性化につながっていく。たとえば、アウェー観戦時に、サッカー観戦だけでなく、温泉で一泊し翌日に近隣の観光地を巡るといった行動につながるのである。また、最近ではツイッターなどソーシャル・ネットワーキング・サービス(注7)も普及しており、「これは面白い」となればたちまち口コミで広がっていく。

岐阜県をホームタウンとするFC岐阜と県内図書館とのコラボ企画も実施されている。たとえば岐阜市立図書館では、読書啓発企画として「FC岐阜と一緒に本を読もう!～図書館でみつける!選手のおすすめ本～」を実施、選手のおすすめ本やコメントを紹介したリーフレットを配

布したり、図書館内で写真やプロフィール、サイン入りボール、ユニフォームなどを展示したりしている。

4 人が集う場としての図書館

地域貢献のほかに図書館が持つ大事な役割として、地域のさまざまな世代が集う場所であるということがあげられる。図書館の利用者は、子育てファミリー、児童・学生、ビジネスマン、シニア層など全世代にまたがる。その利用目的はさまざまだが、本を借りたり返したりする際には基本的に図書館へ出向くことが必要となる。こうした実際に人が集まる場となっていることが図書館の強みである。

そういう点で、図書館は暗く閉じた場所ではなく、明るくオープンで楽しい場所となる必要がある。緑に囲まれた場所にあり、天気の良い日は外に出て木陰での読書と

いうのもいいであろう。これは、公民館や劇場・ホール等他の公的意味合いの強い施設にもいえることで、このような施設を集約することが人の流れを生み、まちのにぎわいを生むと考える。

こうした複合施設の先行事例として、岡崎市の「岡崎市図書館交流プラザ(りぶら)」がある。「りぶら」は「図書館」「活動支援」「文化創造」「交流」の4つの機能で構成され、市民が自ら学び活躍できる知的活動拠点として、また、これからの社会を先取りできる「人」を育む「楽・習・交流」の場として岡崎公園の近くに2008年11月に開館した。岡崎市出身の医師で数多くのジャズミュージシャンを支援した内田修氏の寄贈によるジャズコレクションの保存、展示がされているなど特徴のある施設となっている。2012年度の1日



FC岐阜の展示(岐阜市立図書館 分館)
(資料提供)岐阜市立図書館



読書啓発ポスター(2013年度)



正面玄関(イメージ)
(資料提供)岡崎市図書館交流プラザ



2階館内 お堀通り

平均入館者数は4,696人と強い集客力を有している。以前(従来型)の図書館と比較して、中央図書館の利用は2008年度の約21万人、102万冊から2012年度の約41万人、184万冊まで劇的に増加した^(注8)。

5 これからの図書館

図書館という固いイメージがあるが、これからはこうした遊び心を持つことも大切になってくる。「図書館+a」といった企画をどんどん出し、皆で楽しむことが重要だ。今回は、事例として「図書館+サッカー」を中心に挙げたが、固定概念にとらわれず柔軟な発想を持つことが大切になる。どんなテーマでも一ひねりを加え紹介することで、全く違った物になる。図書館は楽しく、面白い場所と思ってもらえれば、図書館を身近に感じる人が増える。図書館がぶらりと立ち寄りたくなるような場所になれば利用者は自然と増え、地域に根付いた図書館となっていく。それに加えて、集客機能といった図書館の強みを生か

せば、まちの新たな拠点となり、まちの活性化につながるのである。

(注1) 図書館は社会制度上「国立国会図書館」「公共図書館」「大学図書館」「学校図書館」「専門図書館」に分けられ、その目的や根拠・法令もさまざまである。

(注2) 公益社団法人日本プロサッカーリーグ

(注3) 公共図書館は「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設(後略)」(図書館法2条1項)と定義されている。

(注4) 本事業自体は終了している。

(注5) Jリーグからライセンス交付を受けたクラブ

(注6) 「Jクラブはそれぞれのホームタウンにおいて、地域社会と一体となったクラブづくり(社会貢献活動を含む)を行い、サッカーをはじめとするスポーツの普及および振興に努めなければならない。」(Jリーグ規約第21条「Jクラブのホームタウン(本拠地)」第2項)

(注7) ソーシャル・ネットワーク・サービス(SNS:social networking service)とは、人と人のつながりを促進・サポートするコミュニティサービス。Twitter、Facebookなどがその代表例。

(注8) 岡崎市統計書2013年版

(2014.5.8) 共立総合研究所 調査部 渡邊 剛

コラム 図書館を支える図書館 — 不易流行を追求する岐阜県図書館 —

本年度創立80周年の節目の年を迎えた岐阜県図書館は「岐阜のひとづくり、ものづくり、まちづくりを支える」という県民の図書館としての使命を大切にしながら、80年の歴史の中で守るべきものは守り、変えるべきものは変えながら県民に対してより良いサービスの提供に努めている。

同じ公共図書館でも、市町村図書館と県図書館ではその役割は少々異なる。各市町村の図書館はより地域に密着した図書館として、地域住民に対する本の貸出や資料提供などの直接的サービスを行う。一方、岐阜県図書館は、資料の収集・保存・提供を通じた県民へのサービスのほか、県の中核図書館として県内市町村図書館のサービス向上を支援する活動も求められている。また、県立図書館として専門性・学術性の高い資料や郷土資料、児童図書といった特徴的な資料の収集・保存のほか、図書館のサービス向上に欠かせない人材育成(職員研修)にも力を入れている。

図書館の基本的サービスの一つにレファレンスサービスがある。これは、ある事柄について調べたい場合に、資料、図書の検索、提供、紹介を受けることができるサービスだが、こうしたサービスの満足度は職員のレベルが如実に表れるものだ。県図書館は、市町村図書館職員を対象とした研修会の開催を通して、市町村図書館を支える役割も果たしているのである。

また、現在今まで以上に力を入れているのが、若者(ヤングアダルト)層をターゲットとした取り組みだ。たとえば「ぎふけん・おすすめの1冊コンクール」。このコンクールの特徴は、これまでの「感想文部門」に加え、昨年度から「POP部門」が設けられたことだ。POPとは商品名や価格、キャッチコピー、イラストなどを手描きしたものである。「POP部門」を設置したことで、若い世代の参加を期待しているという。募集期間は、7月1日から10月10日までで、入賞作品は岐阜県図書館等にて本とともに展示される。